

第42回「はちしん灌花塾 ～郡上の歴史の補遺を学ぶ～」開催

4月22日(土)第42回「はちしん灌花塾」が本店6階大会議室において開催されました。

地域史家高橋教雄先生をお招きして「ひるがの開拓のあゆみ」と題して講義いただき、当日は当金庫の役職員や一般参加の方36名が受講しました。



<蛭ヶ野の自然環境>

蛭ヶ野は、西に大日岳山麓の「蛭ヶ野高原」、東に鷲ヶ岳山麓の「上野高原」、南に「明野・切立高原」が広がっている。標高890メートル、平均気温11.5度、年間降水量3,000ミリ、強酸性土壌の高層湿地帯で、ミズバショウなどの湿原固有の植物群がある。

1億年前は安山岩を地層とするひるがの湖（古白鳥湖）であったが、7千年前に噴火による火山灰等の堆積により高層湿原が形成された。

<開拓の始まり>

ひるがの開拓は、昭和一五（一九四〇）に凌霜塾が赤坂（現大垣市）の矢橋亮吉の支援により28町歩の土地を蛭ヶ野に購入し「大日道場」を開いたことから始まった。道場には東京・大阪・京都の郷土出身財界人により「大日道場後援会」が組織された。

大日道場運営のテーマを次のとおりとした。

- ①酪農経営による高原地農業の開発と研究
- ②高原地農業の総合文化的研究と調査
- ③満州開拓義勇軍、開拓団の事前研修

<終戦後の引き揚げ>

満州からの引き揚げは、郡上村開拓団841名中455名、琿春高鷲村開拓団690名中449名で、母村にとって引き揚げ者の受け入れは過重な負担となっていた。こうした状況の中、蛭ヶ野地区には郡上村開拓団64世帯等計94世帯が入植した。上野地区には鷲見地区の二男三男が7世帯、切立地区には地元引き揚げ者復員17世帯が入植した。

<開拓の基本方針>

開拓地は未開墾地が対象で、昭和二一（一九四六）年に、①開拓地と認定された土地は所有者の意思にかかわらず、買収面積に制限なく取得する。②買収地は国に所有権があり、その後開拓民に売り渡される。③買収価格は近隣の類似農地の45%で、立木などは国の定める価格で強制的に買収するを条件に買収が行われた。買収用地は蛭ヶ野地区、上野地区、切立地区計1,178町歩であった。

<辻村徳松の奏上>

昭和二一（一九四六）年一〇月二一日天皇の被災状況視察時に、郡上村開拓団から蛭ヶ野地区に入植した辻村徳松は、開拓精神を“いざ友よ 共に築かむ 日留ヶ野に 乳と蜜の流るる里を”と奏上し、この言葉は大日開拓団のスローガンとなった。

<引き揚げ者受け入れ>

昭和二一（一九四六）年に蛭ヶ野地区に入植した94戸は、昭和五八年には49戸に減った。

昭和二三（一九四八）年に各開拓団は開拓農協に移行し、「大日開拓農協」は蛭ヶ野と切立に分離した。その後、昭和三二（一九五七）年には大日・上野・切立地区農協（以下、三地区という）が統合して「大日山麓開拓農協」に改組した。この組織は営農資金の貸し出し、生活必需品の購買、農産物の購買、戸籍、葬式の届けを請け負うなど行政端末機構として、多岐にわたる役割を負っていた。

<酪農の導入>

昭和二九（一九五四）年に59頭の乳牛を導入し酪農が本格化した。三地区では「酪農研究会」が組織され協力体制が整い、昭和三一（一九五六）年に森永乳業へ出荷が始まった。

昭和三二（一九五七）年に入植当初の開拓者融資の償還が始まると、馬鈴薯などの作付け、出稼ぎなど酪農からの離農者が増加した。

昭和三八（一九六一）年に184ヘクタールの牧草地の開墾と乳牛育成舎と搾乳舎、牛乳輸送パイプラインが完成し、一戸当たりの飼育頭数が伸び専門化が進んだ。

<「大日山麓農業協同組合」の発足>

昭和二九（一九五四）年に大根・キャベツの生産に取り組み、漬物用加工工場の建設が行われた。

昭和三二（一九五七）年に「大日山麓農業協同組合」が発足、上野地区にため池が完成、昭和四三（一九六八）年には「高冷地^{そさい}野菜生産組合」が設立され、夏大根の生産が始まった。

<酪農・高冷地野菜の基盤整備>

三地区の営農方針は“米は自給し、酪農”であった。開田計画により上野地区、蛭ヶ野地区に水田とため池が整備された。

昭和五〇（一九七五）年までに幹線道路が建設され、2路線が舗装されるなどインフラが整備された。

<自衛隊演習場建設問題1>

昭和三四（一九五九）年に陸上自衛隊の演習場として、切立開拓地から向鷲見・鷲見地区、鷲見上野開拓地に計2,900ヘクタールの設置を求める要望書が自衛隊から村長に届いた。県知事松野幸泰にも買収計画への協力要請がなされた。

これに対し、水源地、山林、産業を守る研究、既設演習地の視察、正確な資料の収集を掲げて「演習場設置反対同盟」が結成された。

要望に慎重な簗島政一村長に、同年六月に県知事から促進の依頼があり、非協力のときは各種の補助金を考慮するとの条件が付されていた。

当時の高鷲村民は賛成50%、中立20%、反対30%と三分していたが、同年発生した伊勢湾台風の復旧対策の優遇、村の発展と豊かな村民生活の保障がされれば賛成という空気が醸成されていった。

<自衛隊演習場建設問題2>

昭和三五（一九六〇）年には県知事より補助金、交付金削減の通知、さらに買収予定地の値上がりなど簗島村長は対応に苦慮していた。同年に自衛隊から航空測量の伝達があり、地主に無断で基準点の設置が行われた。村は黙認していたが、反対同盟は作業を妨害し停止を求めた。

昭和三九（一九六四）年に村議会は、自衛隊の500ヘクタールの精密測量申し入れに対し、面積の縮小、立ち入り調査の実施、測量と買収は切り離す条件で測量のみ許可した。村は将来に悔いを残さないよう前向きに検討する立場であり、平野県政にかわった県からは、買収価格の相談と補助金等の配慮が示された。

「演習場設置反対同盟」は郡上の水源地を守り自分たちの手で開発していく意思があり、村の発展、自然環境を生かした観光・高冷地野菜・乳牛飼育の振興を見据えていた。

昭和四二（一九六八）年二月に簗島村長は、正式に受け入れ拒否を表明した。

<三白産業>

昭和三五（一九六〇）年以降入植者の離農が増える中、昭和三九（一九六四）年に観光事業（スキー場建設）が始まり、酪農・大根栽培を主とする三白産業が始まった。

昭和四九（一九七四）年「大日山麓農業協同組合」は27年間の歴史を閉じ、各種の業務は高鷲村へ移管された。

<まとめ>

最後に先生は、「蛭ヶ野開拓の歴史は戦前に凌霜塾の設立した『大日道場』に始まり、戦後その精神である“農村の自力更生”“隣保共生による農村不況克服”“勤労・節約・規律”を底流とする『三地区開拓農協』が設立された。その後『大日山麓開拓農協』へと統合され、最後は高鷲村へと移った。」と締めくくられました。

